



# 刈谷

**立** 川の北部に位置し立川下名に属す。北は愛媛県、南は中央に接する。

集落のなかで最も人家が集中する「刈屋」と、北部の「川奥」「浦の谷」をあわせて刈谷が形成されている。集落には現在17戸24人が暮らしている。

刈谷は江戸時代、参勤交代で藩主が滞在した御殿(番所)があり、土佐と伊予を結ぶ重要な地域であった。交通の要衝であったことから人やモノの移動が頻繁で、昭和時代までは商店や飲食店、宿屋のほか娯楽施設まであったとさう。

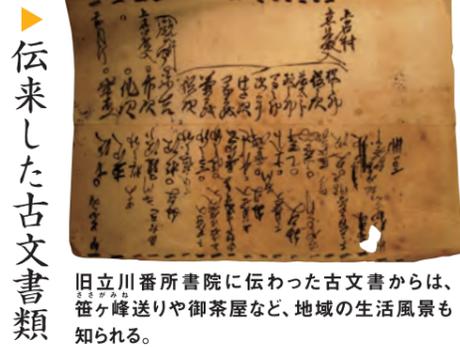
## ●刈谷の文化財

刈谷にある旧立川番所書院(立川御殿)は、立川の歴史性をよく物語っている。古代の丹治川駅設置以来、この地は、「道」と深く関わりながら、歴史を重ねてきた。江戸中期、享保3年(1718)、土佐藩6代藩主山内豊隆が、参勤交代のルートとして、四国山地を縦断する「北山越え」のルートを初めて採用して以来、この街道が幹線道路となっていく。そして、江戸後期、18世紀末に建てられたのが現存する旧番所書院である。

この番所書院の存在を別格として、刈谷では、五社王子宮と八坂神社に文化財が伝わっている。五社王子宮にある明治33年(1900)の建立(再建)棟札は地域の災害記録として注目される。棟札裏面には、同32年7月の未曾有の暴風雨の様子が記される。五社王子宮の社殿は風雨の激鋒により破壊されたと記されている。

### 刈谷の主な文化財

- 旧立川番所書院(重要文化財)  
江戸時代 寛政年間/大豊町
- 旧立川番所書院 伝来古文書類  
江戸時代ほか/大豊町
- 王子権現宮建立棟札  
江戸時代 享保4年(1719)/五社王子宮
- 五社王子権現御神楽新百年祈禱木札  
江戸時代 宝暦3年(1753)/五社王子宮
- 鳥居建立寄附者芳名板書  
昭和時代 昭和59年(1984)/五社王子宮
- 八坂神社建立棟札  
明治時代 明治21年(1888)/八坂神社
- 下名庄屋川井家墓所  
江戸時代ほか



旧立川番所書院に伝わった古文書からは、笹ヶ峰送りや御茶屋など、地域の生活風景も知られる。



**上段の間**  
(旧立川番所書院の内)  
藩主専用の上段の間には、床と付書院があり、棧の大きい格天井が上部を飾る。



この建物は、土佐-伊予国境の警備の番所(関所)と、藩主参勤の土佐国内での最後の本陣(宿所)をあわせたもので、下名村の番人庄屋川井惣左衛門が、江戸時代後期、寛政年間(1789-1801)に建てたものである。地方における書院建築の貴重な遺構として価値が認められている。

立川御殿が今日の風格ある姿に至るまでには幾多の変遷があった。御殿は、番所としての役目を終えた後、明治5年(1872)に個人の手に渡り一時宿屋となったが、昭和48年(1973)に大豊町が譲り受け、その翌年、国の重要文化財に指定された。

昭和56年(1981)からは、老朽化が進んだ建物の基礎や建具などの解体修理工事が開始された。なかでも茅葺屋根の工事は、県内に文化財修復の技術者がおらず、県外から職人を呼んで行われたという。また解体修理に伴い、建物内で発見された古文書などの調査が行われた。その結果、御殿の建築当初の形態が明らかとなり、事業ではその成果に基づいた復元整備工事も行われ、昭和57年(1982)に現在の建物が完成した。

御殿は現在般公開されており、多くの見学者が訪れている。



▲修理前の御殿  
[重要文化財旧立川番所書院保存修理工事報告書](大豊町、1983年)より



▲平成14年度に行われた屋根葺替工事 画像：大豊町教育委員会

**下名庄屋川井家墓所**  
江戸時代、下名では川井家が庄屋役を世襲した。写真上は、旧立川番所書院を建てたとされる川井惣左衛門の墓。惣左衛門は天保6年(1835)84歳で没した。

**五社王子宮の棟札**  
拝殿屋根替・幣殿正遷宮・鳥居建立など、江戸から昭和までの各時代の棟札が伝わる。



**区長の話**  
~結界札の風習~

旧暦の9月9日、五社王子宮の例祭では、神職より、氏子が各家に持ち帰る札のほかに、集落境や集落内に立てる「結界札」が配られる。村上保利区長(82)は毎年、祭りが終わると村境へ向かい、折柄札を竹に括り付けて立てるといふ。古い札は取り除いても良いし、残しておくことも構わないとのことである。

結界札は、刈谷のほか、中央、三谷、一の瀬で確認できる。仁尾ヶ内と中和でも見られたというが、現在は下名の集落でのみ残る風習のようである。



**刈屋遠景**  
昭和34年(1959)の写真。左側に見える茅葺屋根の建物が旧立川番所書院である。

**榜木**  
土佐と伊予の国境に建てられていた標木で、昭和57年(1982)に復元された。是より北愛媛県へ、従是南土佐国と記されている。

**木番所跡**  
土佐藩領における最後の番所。ここを越えたと笹ヶ峰峠、伊予国へと至る。

**荷宿跡**  
参勤交代の際、荷置き場所として使われた荷間屋跡。幕末に坂本龍馬が水戸藩士と面会した場所とされる。

**五社王子宮 八坂神社**  
刈谷の氏神。江戸時代後期の社地は1代4歩(約33㎡)。例祭旧暦9月9日と同じ日に、集落境へ祈禱札を立てる。

**旧立川番所書院(下名村番所)**  
下名村庄屋の川井家が番人役を兼任し、参勤交代の際には藩主の休泊所として使われた。番所裏手には、川井家の墓所がある。下の写真は番所書院の西面、藩主が通用する際に使用したとされる中門周辺。近くの「立川御殿茶屋」(写真上、第1・第3日曜日のみ営業の「立川そば」は人気のメニューである。

**立川御殿茶屋の看板**  
河又橋 駕籠立休憩所

**立川御殿**  
川井家墓所

※本ページの白黒写真は、中西三男編「昭和のおとど白黒写真集」(私家版、2015年)より引用した。

# 中央



**立川**の中央部に位置し、**和**、**刈谷**、**三谷**の一の瀬に接する。

中央部の「成川」と、南東部の「中谷」は下名に属すが、西部の「千本」は上名に属す。かつて「菅蒲」、「井手川口」、「細野」、「今屋」、「平野」という小村も存在したが、現在は無人である。集落には現在13戸21人が暮らしている。

明治中期から昭和初期にかけ、立川では度々小学校と分教場の設置や移転、合併があったが、最終的に立川小・中学校が成川に置かれた。人が集まり賑わう場所へと変わっていった中央が、近代以後、立川の中心地となった。



## 天神宮(上名郷社)の神事面



制作年代は未詳。天神宮の神職をつとめた宮川家に伝わったもの。左から3番目の鬼面は、神社の遷宮の際に、先頭を飾った面という。この面以外の6面には、裏に「宮」の墨銘がある。

## 中央の文化財

中央では、阿弥陀堂・天神宮・後八幡宮・聖神社等に文化財が伝わる。上名の郷社である天神宮には、神鏡・神事用具・棟札等が伝わるが、とりわけ注目されるのは、同宮の神職をつとめた宮川家に伝わる七面の神事面である。宮川家では旧正月9日に「面のまつり」といっ

て、これらの面を床の間に並べ、供え物をしていたという。天神宮に関わる文化財はいずれも上名の文化財といえよう。

一方、千本の阿弥陀堂には棟札が多く伝わる。その内の一つ、宝永7年(1710)の阿弥陀如来像再興の棟札は、現存する本尊、木造阿弥陀如来立像を造立した際のもので、京都の大仏師 福田院卓が豊楽寺において本像を造立したことが知られる。

### 中央の主な文化財

- 阿弥陀堂建立棟札  
江戸時代 承応元年(1652) / 阿弥陀堂
- 木造阿弥陀如来立像  
江戸時代 宝永7年(1710) / 阿弥陀堂
- 神事面 鬼・老人・男・女  
江戸時代 / 個人像
- 八幡宮新建立棟札  
江戸時代 元和7年(1621) / 天神宮
- 建立日記板書  
江戸時代 天保11年(1840) / 天神宮
- 後野権現宮新建立棟札  
江戸時代 寛延3年(1750) / 天神宮(後八幡宮)
- 地主八幡宮建立木札  
明治時代 明治10年(1877) / 聖神社
- 参勤交代道の常夜燈  
江戸時代 天保7年(1836)

## 天神宮の棟札

写真左から、元和7年(1621)の八幡宮新建立棟札、貞享3年(1686)の天神八幡両社新造立棟札、寛延3年(1750)の天神宮八幡宮拝殿鳥居再興棟札、宝暦3年(1753)の八幡宮天神宮本社拝殿上葺棟札。



## 天神宮の建立日記板書

天保11年(1840)千本村年寄勇蔵以下、上名内各集落の寄進者名を記す。



## 天神宮

下名地のなかに建つ天神宮は、立川上名の郷社である。この神職は宮川家がつとめていたため、同家には多数の神事面が伝来している。



## 海津見神社

千本の氏神。成立年代などは未詳。大正元年(1912)寄進者の木札や、昭和8年(1933)奉獻の常夜灯平成10年(1998)社殿修復工事寄付者の石碑がある。



## 阿弥陀堂

正面・側面ともに1間の宝形造。宝永7年(1710)の阿弥陀如来立像や正徳2年(1712)の銘が入った鯛口が残る。



## 木造

## 阿弥陀如来立像

阿弥陀堂の本尊。像高35.7cmで、檜の一本造。地域八十八カ所の仏像と思われるものもある。三谷集落の八十八カ所仏が広がっているものか。



## 路傍の石仏



## 参勤交代道の常夜燈

天保7年(1836)、施主利右衛門、今屋・平野二ヶ村惣中の銘あり。

## 聖神社

中谷の氏神。成立年代は未詳。明治初年から昭和20年代までの棟札、御幣が伝わる。



## 城之尾之城跡

戦国時代、川井勘解由の居城があったとされる。



## 星神社

成川の氏神。かつて春と秋に例祭を行っていた。成川の境に立てられる結界札には「星神社祈禱防災薬大麻」(写真左)と記されている。

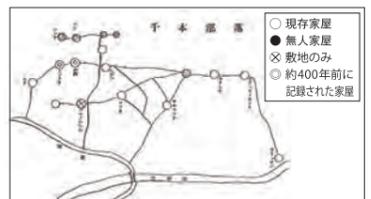


## 立川小学校の屋号調査

立川小学校では、昭和53年(1978)度から数年に渡り、立川の歴史や文化を調べる活動が行われたが、最初に取り組まれたのが屋号調査であった。



▲立川小学校(昭和中期) 画像:大豊町教育委員会



▲千本の屋号 「立川の研究」(大豊町立立川小学校、1983年)より

## 区長の話



前野千香子区長(63)の家は成川で旅館と飲食店を営んでいた。小学校があった頃は、運動会があれば大勢の人たちが昼食を食べに来てくれた。山の仕事が増え、山が盛んだった頃は、愛媛県や徳島県から仕事で来た人がよく立ち寄ってくれていたという。中央が立川のなかで一番活気があった時期もある。しかし今は、中心地であった成川ですら人が減ってしまった。人口減少は深刻な状況だが、その一方で、近年都会から移住してきた家族があり、集落の励みの一つになっているという。

▲中央の世帯台帳(昭和中期)